

来し方を振り返って、次の時代に新たなイメージを

—社会から求められる薬剤師への道程としての生涯研修—

内山 充

今年は、3月におきた東日本大震災と福島原発の事故をはじめとして、国内外が大きく揺れ動いた多難な年であった。国内の被災地の復興や除染はもとより、国内外の数多くの不測の事態による混迷や破綻から、一日も早く抜け出して健全な姿に戻るための、人間の知恵が験されているともいえる。

社会情勢や環境条件に大きな変化が起こったときには、それに惑わされて軽挙妄動したり、あるいは逆に変化の意味を理解しようとせずに頑なに身を守ろうとしたりするのは愚かな行為である。変化の中に身をおきながら、より良い社会や環境を作るには自分が何を目標として生きればよいか、そしてそれに対応できる最善の方法は何かをいち早く見出すことが、個人にとっても集団にとっても必要である。梅原猛氏の言を借りれば、変化という実験によって得た教訓をかみ締めて、良いところを生かしながら新しいイメージを描く理論を作り、それを指導理論にすることを躊躇してはならないという。

薬剤師にとって今年は、大変革とも言うべき新教育体制の6年教育が最終学年まで進んだ年でもあった。教育制度改革の当初は、何かと不備や戸惑いに悩まされるものである。第1期生として6年間育てられた薬学生は最終年を迎えて、迫り来る新しい薬剤師としての巣立ちを、どのような感慨をもって迎えようとしているであろうか。

薬剤師教育の大変革が、学問の進歩と医療環境の近代化による、薬剤師に対する社会的要求の大きな変化によってもたらされたことを考えれば、社会から求められる薬剤師を作ることが、われわれ薬学関係者の責務であり、喫緊の目標であるといえる。そして、薬剤師を「求められる薬剤師」にまで作り上げるには、大学教育のみならず卒後に継続する生涯研鑽の整備と充実が不可欠であることも明らかである。

このような情勢に対応して当認証機構のできることにして、薬剤師生涯学習の原則と在り方等についてこれまで随時各所で述べてきた内容を取りまとめ、イメージとして公表して次の時代の指導理論の参考として提言することが務めであると考えてに至った。また、本年10月には厚労省医政局で、「専門医の在り方検討会」が発足し、卒後の臨床研修に続く生涯学習と認定制度及びその第三者評価のあり方につき熱心な議論がなされ始めた。同じ医療職としての職責を持ち、同様の生涯研鑽体制と評価機構をもつ薬剤師の生涯学習への考え方と現況を、外部に発信する必要性も生じている。

そこで、12月16日に開催された当機構理事会及び認定制度委員連絡会を機として、これまで本コラム欄に掲載した内容に準じてイメージ図を作成し、両会議に提案して成案を得つつある。新年を迎えたら早々にイメージを公表する予定である。多難であった平成23年を振り返りつつ、来るべき次の時代での新しい手引きとなることを願っている。

(2011. 12. 25)